

## コンパクト&ユニバーサル ~ 参考事例 ~

JFMA ユニバーサルデザイン研究部会

### 米オレゴン州ポートランド

公共FMのゴールとしての「コンパクト&ユニバーサル」というコンセプトを体現したまちはあるのだろうか。公共FMの先進自治体としては青森県、武蔵野市、三鷹市、浜松市、秦野市などが挙げられる。「健康・医療・福祉のまちづくりの推進ガイドライン」では参考事例として、志木市、新潟市などが挙げられている。またコンパクトシティとしては富山市、高岡市、健康都市としては市川市、八幡浜市、大府市、尾張旭市などが挙げられることが多い。

しかし総合的な「コンパクト&ユニバーサル」という点では、これもまた最近たびたび取り上げられる米国オレゴン州ポートランド市の事例が多く示唆を与えてくれると思う。

- 都市成長境界線 UGB: Urban Growth Boundary(境界線内部の面積は943km<sup>2</sup>)
- ・都市部(20年間の都市成長に必要十分)と田園(農地・森林)の土地利用区分境界
  - ・1971オレゴン州土地利用プログラム/1973州土地利用法で義務づけ
  - ・都市部の公共施設と公共サービス(道路、下水、上水など)の効率的提供。
  - ・乱開発を防ぎ、優れた農地・森林の保全。
  - ・都市化保留地域(Urban Reserve):境界線拡大を可能とする地域/現在のところ拡大なし



私は、昨秋に初めてポートランド市を訪れたが、公共交通の在り方、都市成長線 (UGB) の設定による計画的なコンパクト化、市民主導のまちづくりなど参考にあることが多かった。ポートランドは、環境都市、クリエイティブシティ、ウォークアブルシティであるとともに、「コンパクト&ユニバーサル」の先進事例と言える。その要因は私見だが、次のようなものである。

都市成長境界線 (UGB) が可住領域を限定していること。これにより、小さなエリアで生活が完結できること。倉庫街の小さな街区を活かした小規模開発が中心であること。LRTやバスなどの交通・移動のハード面でのバリアフリーが高レベルであること。ユーザーの多様な選択肢を用意していること (移動手段であれば、徒歩、自転車、LRT、バス、ローラ

ースケートなど)。古い施設のリノベーションが適度な「緩さ」をもたらしていること。アートが街に多様性に対する寛容な雰囲気をもたらしていること。居心地の良さをつくる知恵と工夫のレベルが高いこと。カフェとバーが多いこと (街中いたるところ)。市民参加のプロセス。知恵に価値を置く共通認識。人がとても親切でフレンドリーなこと。中心市街地ではモータリゼーションから公共交通機関へのシフトと、市街地では車の運転マナーも過剰なほどに良いこと。ユーザー目線に立つ多様な選択肢 (ハードとソフト) の提供などである。

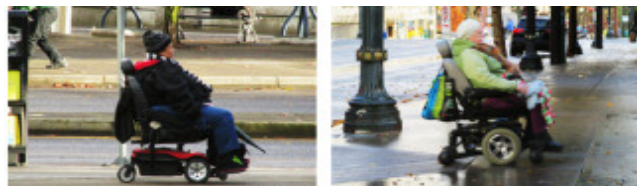
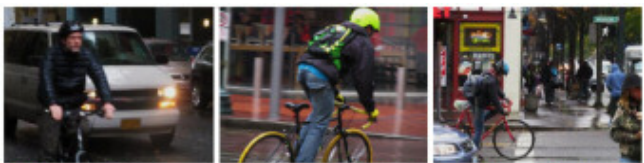
ポートランドの LRT (MAX) は、渋滞解消を図るため、市の中心ゾーンにはトランジットモールを導入している。渋滞緩和と政策をより進めるために、通勤者は MAX の駅まで車で行き、無料の駐車場に車を置き、MAX に乗り換えるパーク&ライドを採用している。駅には車椅子使用者の配慮がなされ、床高 20cm の低床タイプの車両は、扉が開くとステップ下からアプローチ板が出てくる。車椅子使用者とともに、カート、ベビーカーなどにも優しいユニバーサルデザインが徹底されている。交通手段がシームレスかつ快適に連続しているため、誰にとっても利便性の高いものとなっている。また、料金設定を低く設定したことで利用者が急増したという。

市内を歩いていると、車椅子、特に電動車椅子で買い物をしている人や街を走っている人を多く見かける。障害のある人も自然体で日常生活を営んでいる。このように自宅から公共交通機関を利用して都心部へ出てくるのが可能なだけの、ハード的なアクセシビリティが十分確保されている証左だろう。街中ではパーソナルモビリティも多く見かける。また古い建築物のリノベーションなどにおいてはバリアの多い部分でも、ちょっとした工夫でアクセシビリティを上げている事例も多く見かけた。

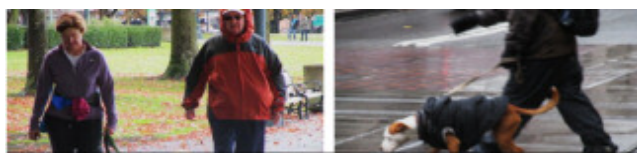


こうした、交通機関のシームレスで快適な移動容易性の確保、多様な移動手段の選択肢、初めて訪れたものでもわかりやすいサイン、都心部における機能の集約、ちょっとした工夫、困ったことがあれば助けてくれる市民の存在などが、トータルなユニバーサルデザインを実現し、過ごしやすさ、住みやすさをもたらしている。で指摘したように、都市空間の歩行空間に求められる機能である①安全性、②健康性、③利便性、④快適性が、建築だけでなく摂南大学田中直人氏が「都市・建築のユニバーサルデザイン」く、まち全体で高いレベルで実現されている。また、パール地区のブラウンフィールド再開発のように LEED-ND 取得するなど、総合的に持続的なまちづくりにつなげている。(似内志朗)

- ・低床式のLRT
- ・街中のシームレスな移動が可能。
- ・安全で、誰もが使いやすい。
- ・美しいプロダクトデザイン。車体広告。



街でよく見かける車椅子  
移動制約者が街に出やすい環境(都市・交通・人)



車社会の米国で、ポートランドは特異な公共交通都市  
車がなくても十分生活ができる、人が歩いて暮らせる環境  
公共交通、オープンスペース充実、都心居住  
居心地のいい、人にやさしいヒューマンスケールのまちづくり



## 富山県富山市

富山市まちづくりにおいて、公共交通 LRT を軸とする都市構造の再整備のシンボルが富山港線「ポートルム」である。JR から市が引き取り、公設民営で 2006 年に開業した。JDN 記事(曾川大氏)によれば、「通勤、通学にくわえ、高齢者の利用が増え、家に閉じこもりがちだった人に外出の機会を作った意味は大きく、元気な高齢者が増えれば、医療・福祉の行政コストが軽減される」のである。今春の北陸新幹線開業に合わせて、ポートルムと富山駅南側の LRT (環状線など) と接続される予定である。また、LRT のトータルデザインのディレクションを GK 設計が行った。車両や電停、サインやカラーシステム、IC カード関連、広報ツール、ユニフォームや名刺などをワンコンセプトでデザインされている。富山港線の愛称は公募で「PORTRAM」とし、また車両デザインも市民アンケートの意向に基づいているという。

今冬、富山市を訪れたが、南口の環状線(ループ)沿いは、あちらこちらで再開発が行われ、富山市へのコンパクトシティへの取り組みの意思が感じられる光景だった。また、まちなか、特に環状線沿いはインフラのバリ



アフリー化が進み、特にLRTは低床式のストレスなく乗降できる設計となっており、高齢者・障害者を含む様々なユーザーが使いやすい構造となっている。また、ちょうどクリスマスシーズンだったこともあり、行くルカのLRTの車内は、センスの良いデコレーションで飾られ、乗客や観光客へのホスピタリティを感じさせるものとなっていた。また、LRT周辺の歩道等についても、地域性に配慮したガードレールのデザインなどに、細かな配慮がなされている。(似内志朗)



新型車両は低床式。  
グッドデザイン+ユニバーサルデザインが徹底。



クリスマスのシーズン、車内は飾りつけて一杯。  
ホスピタリティとユーモアが、居心地の良さをづくりだす。

## 富山県氷見市

氷見市役所は旧市役所庁舎が老朽化に加え耐震上問題があることがわかり、検討の結果、旧高等学校の体育館（一部校舎含む）を再利用することとなり、全国的にも類を見ない、「体育館を改修して市庁舎として再利用する」という手法により、既存施設の有効活用、整備費用の大幅な低減、集約化による市民サービスの向上が実現し、加えて「廃校体育館をリフォームして出来上がった市庁舎」という風変わりな施設を観光資源と捉え、市では、「新市庁舎ガイドツアー」と銘打ち、希望者には庁舎案内を毎日実施している。多くの見学・視察を受け入れ、観光都市「氷見」の実現に資するという、一石三鳥の相違の取り組みを行っている。これらの実績が評価され、2015年のJFMA賞優秀賞も受賞の運びとなった。

氷見市役所新庁舎において注目すべきは、体育館のリノベーションにもかかわらず、その大空間や、校庭であった敷地の広さを生かしてユーザー（市民）の使いやすさ、アクセスのしやすさなど、広い意味でのユニバーサルデザインを創造的にレベルアップしていることにある。市役所庁舎が市街地から離れたところにあるのが玉に瑕であるが、その計画手法

には大いに学ぶところがある。

・市民サービス機能の集約化 : 以前は、本庁舎、教育委員会の庁舎、介護・保健部門の庁舎、上下水道部門の庁舎などが分散し、ユーザーである市民にとっては不便であったが、これらを集約し、利便性を格段に向上させた。

・広大な校庭の利用 : 新庁舎では、高等学校であった敷地の広さを生かし、敷地内に市民駐車場 120 台 (旧庁舎では 70 台) を確保したうえで、職員駐車場を設けた。もっとも、これは新市庁舎が市街中心部から離れたための必要性という側面もあると思われる。

・体育館の空間を生かしたワンフロアサービス : 市民の利用頻度の高い窓口をアクセスの良い 1 階に集約して、利用者の移動距離を最小限にする工夫を行っている。また、一目瞭然のわかりやすいサインを掲出することにより、さらにユーザビリティを高めている。また、2 階部分についても各部署間の壁をなくしたワンスペース化により、業務の透明性・見える化、組織を超えた横串の実現、快適性を一度に実現している。体育館のハイサイド窓と付け加えられた逆アーチの天井は、気積を小さくすることで空調効率を上げ、また反射板として奥行き深い体育館の空間を、自然光がいきわたる快適なオフィス空間とする等、創意工夫に満ちている。(似内志朗)



## 千葉県佐倉市 ユーカリが丘

ユーカリが丘は千葉県佐倉市に位置するベッドタウンである。特徴は、1971 年にデベロッパーである山万が開発を始め、1979 年に分譲が開始された完全民間企業主導型のまちづくりであることだ。短期的な利益ではなく、長期的な視点から、「成長管理型」の開発が行われ、①自然と都市機能の調和、②少子高齢化、③安心・安全、④文化の発信、⑤高度情報通信化という 5 つのキーワードに沿った開発がなされている。しかも 1970 年代からこうした志高い開発が行われていたことは驚くべきことである。コミュニティづくり先端事例として国内外の企業や自治体からの視察が相次いでいるという。

ニュータウン内には山万が運行する新交通システム山万ユーカリが丘線が走っており、まちの主要な施設、宅地、京成電鉄のユーカリが丘駅を環状に結んでいる。最近の LRT のようなユニバーサルデザインへの徹底した配慮がなされているわけではないが、実用性の高い小型鉄道車両は住民の利便に大いに役立っている。また、低床式バスの運行も始められており、新交通システムのユーザビリティ面での補完を行っている。(似内志朗)





## 浦安市 工場をデイサービスセンターにコンバージョン

東京ディズニーランドのある場所として有名な千葉県浦安市は、日本で一番若いまちでもある。日本全体の高齢化率が25%という中で、浦安市の高齢化率は14%。しかし、今後は急速に高齢化が進んでいくと予想される。さらに地域ごとにばらつきがあり、埋め立てによって市域が拡大したエリアは高齢化率が低く、元町地域と呼ばれる、もともとあった浦安のまちは、高齢化率が高くなっている。そのため、元町地域を中心とした高齢者対策が急務となっており、高齢者の移動手段として「おさんぽバス」が市によって運行されている。2011年には「人生の現役養成道場」、「夢のみずうみ村浦安デイサービスセンター」が開設された。

山口県にある夢のみずうみ村は麻雀やカジノなど「大人の遊び」を取り入れた「自己選択自己決定方式」のデイサービス施設として、そのユニークな考え方や運営が注目されている。みずうみ村の運営方針に共感した浦安市長が Manifesto に掲げ、誘致した。株式会社夢のみずうみ村が、土地・建物を所有者から賃借し、大手音響メーカーの工場だった建物をリノベーションした民設民営型の通所デイサービス施設である。既存施設を有効活用することで初期コストも低減できる。リノベーションでは、新たにトップライトや中央階段を設け、ユーズド家具や手作り感のある間仕切りで家庭的、日常的な空間づくりをした。本格的な設備も装備され、陶芸、木工、手芸、料理などの趣味を存分に楽しめる。マッサージやトレーニングマシン、通路のゲームコーナーなどで楽しみながらリハビリができる。施設内通貨「ユメ」が効果的に使われていることも特徴だ。独自の評価手法「MILK」を実施。(M=ムーブメント：身体の動き、I=インテンション：心の動き、L=ライフ：やる気、生命力、活力、K=キーピング：根気、持続、継続)。(仲田裕紀子)



## 市川市 防災公園と健康増進

防災と健康はまちづくりのキーワードになっている。千葉県市川市は2004年、市制施行70周年を機に健康都市いちかわ宣言を行った。WHOが提唱し世界の都市で採用されている「健康都市」の取り組みを推進し、誰もが個々の能力を生かしながら健やかに、生き生きと暮らせる「健康都市いちかわ」をめざしている。

市川市では減災の視点から、市内2か所に防災公園を整備している。2つの公園は耐震性飲料用貯水槽、防火水槽、雨水貯留槽、非常用トイレ、非常用自家発電設備、災害時には煮炊きができるかまどベンチやテントが張れるパーゴラなどを備え、防災拠点・一時避難場所の機能を有している。日ごろから、市民に防災意識を持ってもらえるよう災害時の公園の役割や設備の利用方法を解説したボードを設けている。

地域の防災拠点として整備された防災公園は、平常時には市民の憩いの場として利用されている。快適で魅力的な場所であることはもちろん、多様な人たちの健康づくりに寄与するように計画されている点も、この公園の特徴だといえる。敷地は最大約13mの高低差がある。この自然な高低差を利用して園内は約2%のゆるやかな勾配がある。段差のない、ゆったりとした園内を散策することは、リハビリや健康維持にも効果的だ。所々にベンチや四阿、パーゴラが配置され、疲れたらすぐに休憩できるようにもなっている。また園内を一周するジョギングコースには、消費カロリーを示すボードもあり、運動する人の励みになっている。(仲田裕紀子)





### 岩手県 IGR いわて銀河鉄道の「IGR 地域医療ライン」

高齢者の通院のための移動を支える鉄道のサービス事例を紹介する。いわて銀河鉄道では、岩手県北部から盛岡の病院に通院する高齢者をサポートする総合サービスを行っている。「IGR 地域医療ライン」は列車の後方車両の全座席を通院客の優先席とし、アテンダント（付き添いサービス員）が乗車し、体調や二次交通に不安のある人をサポートする。「あんしん通院きっぷ」という割引切符があり、介護者も利用できる。

また専用駐車場の設置やタクシー会社との連携など、安心して病院に通えるように自宅から駅、さらに駅から病院までの移動を含めたサービスメニューを用意しているのが特長だ。（仲田裕紀子）



### 帯広市 医療と介護を核にしたコミュニティモデル

後期高齢者の割合が増加し、医療と福祉の連携がますます必要になり、国土交通省や厚生労働省でも新たなまちづくりの指針にしている。

行政と連携したがんドックの検診など「第二次予防医療」に積極的に取り組む帯広市の北斗病院では、在宅をベースに医療と介護を統合する新たなシステムとして「福祉村」構想を進めている。

2014年6月に「医療・介護総合推進法」が成立し、地域医療と地域包括ケアシステムの一体化が進んでいくことになる。帯広の「福祉村構想」は、地域医療支援病院に認定されている北斗病院を核に医療と介護の統合をコンセプトにしたコミュニティモデルを創造する試みである。いくつになっても生涯現役として充実した人生を送ることは多くの人の願いである。それを実現するためには、「健康寿命」を伸ばすための予防医療や健康増進施設やプログラムが求められる。さらに在宅介護をサポートする施設やサービスの充実も必要だ。

2013年に開設されたリハビリテーションの専門病院「十勝リハビリテーションセンター」には、訪問リハビリテーション、訪問看護ステーション、訪問介護ステーションといった在宅支援の機能もある。さらにサービス付き高齢者住宅や介護老人保健施設建設の計画も進められている。

将来的には、福祉村の中に医療介護のサービス拠点とともに運動拠点をつくる構想だ。サービス拠点とは、行政の政策を含めて、地域住民に介護や医療のサービスを提供するためのもの。運動拠点とは、フィットネスクラブのような健康増進施設、温泉、カフェ・レストランなどのさまざまな活動施設のこと。高齢者だけでなく、さまざまな世代の人たちの健康増進、交流の場になる計画だ。北斗病院の鎌田一理事長は、世界で最も急速に高齢化が進む日本が、医療福祉のコミュニティモデルをつくることで、アジアをはじめ、海外にそのノウハウを輸出することで新たなビジネスになると示唆する。

（仲田裕紀子）



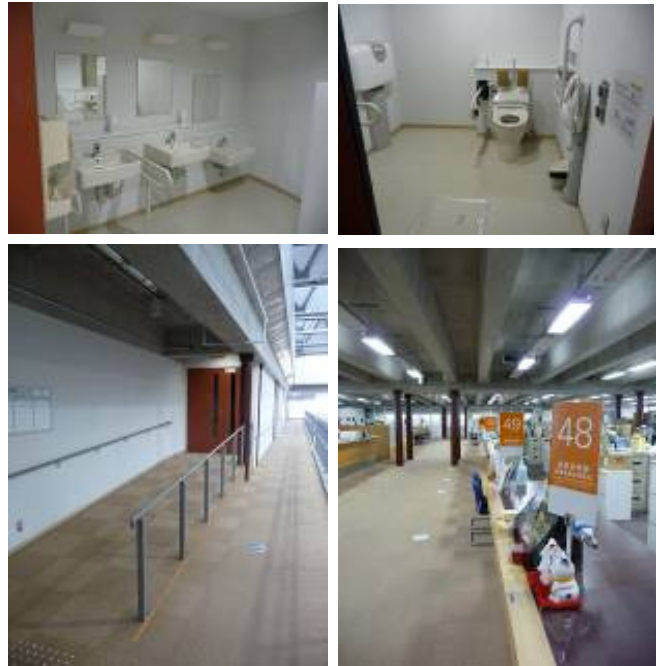


## 基本構想から施工者選定までのプロセスに市民が参画する 「立川方式」

老朽化や防災面から、全国各地で庁舎の建て替え計画が進んでいる。

立川市は 1958 年に建設された旧庁舎の老朽化や狭隘化、それに伴う建物・設備の補修・改修費の増加、分散化などを解決し、多様化する行政サービスに対応するため、市中央に位置する泉町に用地を取得し、新庁舎を建設した。「日本一ユニバーサルデザインを考慮した庁舎」を計画したいという市民の声に応え、市民と専門家による検証を繰り返し、通路や出入口は車いすが通行できるよう幅員は 1.4m 以上を確保し、各階には男女別のトイレの他、車いす対応便座、ベビーベッドやオストメイト対応流し、手すりなどを装備した「だれでもトイレ」などユニバーサルデザインに優れた庁舎となった。さらに省エネルギーシステムやクリーンエネルギー（太陽光、風力、天然ガス等）利用システムを導入し、環境性能を高め、ランニングコストの低減をめざした。

この庁舎のユニークな点はプロセスにある。新庁舎建設にあたり、2003 年度に「立川市新市庁舎建設市民 100 人委員会」が立ち上げられ、新市庁舎建設の基本構想と旧庁舎の利用計画案が市民によって作成された。この市民案に基づき基本構想を策定し、2005 年度には「立川市新市庁舎市民対話型 2 段階方式による設計者選定競技」により設計者を決定した。さらに 2007 年度には「市民との連携による一括発注技術提案型総合評価方式」により施工者を選定。基本構想から施工者選定までのプロセスに市民が参画する「立川方式」という庁舎建設事業の新しいモデルを確立し、話題となった。（仲田裕紀子）



## 高岡市 駅前に高校と図書館を集約し、生涯学習の場に

高岡銅器や漆器などの伝統工芸で栄え、歴史と伝統のある富山県高岡市。北陸新幹線開業など、飛越能地域の交通の要衝として着々と都市整備が進められている。一方で、高齢化、人口減少、郊外の大規模商業施設のオープンなどで駅前から続く商店街はシャッター通りとなりつつある。

高岡駅前の「ウイング・ウイング高岡」は 12 階建ての公益施設と 14 階建ての民間施設が入居する複合施設。2004 年、「高岡駅前西第一街区第一種市街地再開発事業」による再開発ビルとして完成した。ビジネスホテルや商業施設とともに高岡市立中央図書館、生涯学習センター、富山県立志貴野高校が入居している。

富山県立志貴野高校は生涯学習機能をあわせもつ定時制単位制高校。「働きながら学ぶこと」、生活にあわせ「自ら計画したペースで学ぶこと」など、時代の変化や新しいライフスタイルに柔軟に対応する学習の仕組みが工夫された学校だ。一般市民とともに学ぶ「特別講座」や、地域でのボランティア活動等を通して生涯にわたって「学ぶ意欲」を持った生徒の育成をめざしているという。少子化が進む中で小中学校の統廃合が話題になっているが、これからは高校の統廃合も進んでいくことになる。駅前の中心地に新たな役割を持った高校や生涯学習の場を設けることで市民の利便性や学習意欲を向上させるユニークな試みだといえる。（仲田裕紀子）



